

『ソロモンの歌』における終わらない作品の意味
— ミルクマンの継続する探求 —

はじめに

精神的な成長を人はいつまで経験するのだろうか。普通考えられているのは「鉄は熱いうちに打て」の言葉が表すように若いころであろう。トニ・モリソン (Toni Morrison, 1939–2019) の『ソロモンの歌』 (*Song of Solomon*, 1977)¹ の主人公ミルクマン (Milkman) は 31 歳にして自分のアイデンティティを発見するというやや遅い成長を見せている。ミルクマンのあだ名の由来は、母乳を飲む年齢を過ぎた後にも、母親から授乳されていたという事実に基づくものだが、この「ミルク」という言葉は、赤ん坊の飢えや欲求を連想させるもので、それだけに自己を知りたいという探求の願望とも合わせて考えられやすいあだ名と言える。

あるはずのない金塊を探す過程で祖先を知っていくミルクマンであるが、この発見の本質を自己にあるとするドロシー・H・リー (Dorothy H. Lee) は “ Throughout, the liberating goal of the pilgrimage is emphasized by symbols and images related to flying. The quest is for the self-knowledge that leads to transcendence, as the protagonist finally discovers how to ride the air ” (64) とし、ミルクマン自身の個人的発見を強調している。これに対して、ジュージダ・ベネット (Juda Bennett) はミルクマンの父が、白人のようだった母親の名前を知らないという事実に関連して “ This whiteness and the missing name both symbolize loss for the Dead family, and Milkman’s journey leads him to question the significance of these facts ” (209) とし、黒人であるミルクマンにおける過去の探求と白人性の関連を述べ、個人の発見というよりは、家族と人種の問題を重視している。さらにヴィッキ・ビスビス (Vikki Visvis) は黒人音楽と黒人のルーツを述べる一方 “ Morrison’s statements and Milkman’s lament at the close of the novel suggest that *Song of Solomon* memorializes a culturally specific method of healing now undermined as a result of white assimilation ” (266) としてやはり

人種と白人同化の問題をミルクマンの探求と結び付けている。

作品中で飛ぶ行為が重要な行動として表現されているが、4歳で人間は飛ぶことができないと知ったミルクマンが作品の最後で友人ギター(Guitar)に向かって飛ぶ行為で終わるこの作品は、ミルクマン自身の発見が重要なテーマであり、家族や人種の問題よりも個人的発見にその本質があると私は考える。作品の最後で、ミルクマンがギターに対して飛ぶ場面を引用してみる。

Milkman stopped waving and narrowed his eyes. He could just make out Guitar's head and shoulders in the dark. "You want my life?" Milkman was not shouting now. "You need it? Here." Without wiping away the tears, taking a deep breath, or even bending his knees—he leaped. As fleet and bright as a lodestar he wheeled toward Guitar and it did not matter which one of them would give up his ghost in the killing arms of his brother. . . .(337)

ミルクマンがギターに飛び掛かり、戦いの結末が示されていない終わり方である。この終わらない作品の構成とミルクマンの探求と発見という個人的問題を絡めて論を展開してみたいと思う。終わらない作品の特徴は、作品のテーマとどういう関係があるのだろうか。

1. 獲得と喪失の矛盾

この小説の主要なプロットは、失われた金塊をミルクマンが探すというものであり、その過程でミルクマンは家族の歴史を発見する。元々ミルクマンが金を欲する理由は、父親の影響から逃れて独立したいというもの。そしてミルクマンと共にその金塊を協力して手に入れようとする友人ギターは、自分が属する「七曜日」²という組織のために金が要するというもの。理由は違うにしても双方ともに金を

欲している。

確かに、ミルクマンは黒人の中産階級の出身であり、そしてギターは黒人の労働者階級の出身である、という違いはあるものの、二人は金を欲するという共通項が見受けられ、そして金を度外視しても二人には友情という結びつきが見られる。「七曜日」についての意見をぶつけ合った後のミルクマンとギターの様子をここで引用してみたいと思う。ぶつかり合いの後での固い友情が感じられるのではないだろうか。

They had not seen much of each other since that argument about Honoré versus Alabama, but the quarrel had been cleansing for both of them. They were easy with each other now that they didn't have to pretend. When in conversation they came to the battleground of difference, their verbal sparring was full of good humor. Furthermore, their friendship had been tested in more immediate ways. The last six months had been dangerous for Milkman, and Guitar had come to his aid over and over again. (114)

言い争いの結果、互いの気持ちが悪くなるのではなく、逆に二人は近づき率直にふるまえるようになったという説明である。そして危機に陥ったミルクマンを何度も救ったギターである。これは深い友情を表す説明として十分ではないだろうか。マルコム X などの黒人指導者の例を挙げて特に「七曜日」の意味について説明しているラルフ・ストーリー (Ralph Story) は、ミルクマンとギターについて “ Their differences are political and classical and automatically make them frightened antagonists ” (155) としているが、上記の引用では政治や階級の差を超えて友情が見られる。

そもそもミルクマンとギターの出会いは、ミルクマンが幼少のころに遡り、そして物語の重要な人物であるパイロット (Pilate) をミ

ルクマンに紹介するという役割をギターはしている³。父親から近づくことを禁じられている父親の妹パイロットという女性についてミルクマンが強い興味を持つようになり、やがて物語の進行とともに、ミルクマンは家族の歴史を知るばかりではなく、自分の未来にも大きな意味を与えるパイロットという女性の元へ行くことが出来たのは、ギターの存在があつての事である。知らないことについて知識を与え、人生に大きな意味を与えるギターの役割は幼いころからミルクマンにとって重要である。階級の差があるにしても同じ故郷の年上と年下という間柄によって、ギターとミルクマンは互いに強く結びついていたと言える。ギターの存在によってミルクマンは、人生の新しい局面に目を向けるようになり、少年から大人への階段を上り始める、といつても過言ではない。少年のころも成人してからもミルクマンとギターの結びつきは強い。

ミルクマンとギターは金塊を探す目的で互いに協力するわけだが、この金塊は実は既に失われているという事をミルクマンは知る。しかし、ミルクマンは探す過程でシャリマーという町の子供たちが歌う遊び歌の中で、自身の祖先についての知識を得る。子供たちの歌うソロモンという名前は自分の父方の曾祖父であり、自分の祖父ジェイク(Jake)の父であるという知識である。また祖先にはインディアンの血が混ざっていた事など子供たちの歌の中に祖先と分かる名前を四人ほど見つけ出す。金塊は見つけられなかったが、ミルクマンは祖先の知識を獲得する。ミルクマンはこの知識の獲得に興奮し、以下のような様子を示す。さらなる祖先の知識を色々推測して喜ぶミルクマンは“ He ran back to Solomon's store and caught a glimpse of himself in the plate-glass window. He was grinning. His eyes were shining. He was as eager and happy as he had ever been in his life ”(304)という様子を見せる。知識の獲得に喜んでいるミルクマンが明らかであろう。

しかし、この獲得とは反対にミルクマンは喪失も経験する。強い繋がりがあったギターによる、ミルクマンが金塊を盗んだという誤

解によって、二人は完全に敵同士になってしまう。結ばれていた二人は断絶する。子供の頃も成人してからも互いに結ばれていた二人は、このような会話をするほどまでになる。

“ Was my name on the crate? ”

“ I didn't look. ”

“ Would I send a crate of gold to Virginia— *gold*, man. ”

“ You might. You did. ”

“ Is that why you tried to kill me? ”

“ Yes. ”

“ Because I ripped you off? ”

“ Because you ripped *us* off! You are fucking with our work! ”

“ You're wrong. Dead wrong. ”

“ The 'dead' part is you. ” (297)

ミルクマンの説明にもかかわらず、ギターはその話を信じない。結ばれていた二人は殺そうとする人間と殺される人間という、憎しみの関係に変わってしまう。祖先の知識の獲得と同時に、友情の喪失という矛盾を経験するミルクマンである。獲得と喪失の矛盾の表象が明らかである。

ギターはあくまで南部のコミュニティーの産物である「七曜日」という組織を重視している。反面、ミルクマンは祖先の知識を得るために、そのコミュニティーを捨て北部での経験を得る事によって新たな人生の局面に入る。友情の喪失という分断は、南部と北部という反対の特徴も持つが、ミルクマンの知識の獲得と友情の喪失という矛盾、知識の獲得による喜びとギターからの憎しみを受けるという矛盾は、リチャード・ヘイマン(Richard Heyman)の述べるソロモンとミルクマンについての獲得と拒絶の矛盾にも当てはめられる。つまりソロモンが “ He re-centers his Self on Africa, while rejecting the very real experience of his people in America.

Likewise, Milkman must reject the Southside community to “fly solo” and dis-cover his origins”(390)という事である。

作品の主要なプロットである金塊を探すという行動は、知識の獲得と友情の喪失という矛盾を生み、同時に知識の喜びと友人であった人間からの憎しみを生じさせるという矛盾を生む。得られない金塊の探求から生じる矛盾は作品の中で、重要な表象と考えられる。得る事と失う事の正反対の特徴が作品中で重要である。

2. 女性の犠牲

第1節では得られない金塊の探求によって祖先の知識の獲得と友情の喪失という正反対の結果を生じる主人公の様子を示したが、第2節では作品中に見られる女性の役割に注目してみる。主人公が金塊を探すきっかけになるパイロットという父親の妹のみならず、作品中での女性の役割は無視できない。ここではミルクマンの母親ルース(Ruth)のエピソードと彼の恋人であったヘイガー(Hagar)との恋の結果に注目してみたい。

『ソロモンの歌』におけるソロモンがアフリカに飛んで行ったという伝説の裏に、女性の存在があるとするゲイ・ウィレンツ(Gay Wilentz)は“ When the father soars off, there must be someone left to teach the children their names ”(64)と母親の役割に注目している一方、アフリカの文化一般について“ Within an African context, the role of the woman has been that of educator of children into the culture ”(64)とアフリカ系アメリカ人女性のモリソン作品にも重要と思われる意見を述べている。ミルクマンの母親の以下のエピソードは、彼に人生の転機となる教えを凶らずもしていると思われる。ミルクマンの父親がルースと言い争いになり、拳で彼女を殴るという場面である。ミルクマンが直後に父親の後襟をつかみ、椅子から投げ飛ばした後の様子を引用してみる。

There was the pain and shame of seeing his father crumple before any man—even himself. Sorrow in discovering that the pyramid was not a five-thousand-year wonder of the civilized world, mysteriously and permanently constructed by generation after generation of hardy men who had died in order to perfect it, but that it had been made in the back room at Sears, by a clever window dresser, of papier-mâché, guaranteed to last for a mere lifetime.

He also felt glee. A snorting, horse-galloping glee as old as desire. He had won something and lost something in the same instant. . . . (68)

父親の母親への暴力、そして殴られる母親という犠牲の結果、それまでの絶対権力であった父親への反抗をはじめて経験したミルクマンである。父親はミルクマンに攻撃されたショックで口を利くことが出来なくなる。また、長年の間、どんな集まりに出かけても自分が一番背が高いから、絶対誰にも負けない人間であるという自信は、投げ飛ばされる事によって、崩れ去る。父親は息子が自分以上の力を持っている事を知った瞬間であり、ミルクマン自身は、父親を投げ飛ばすという行為の結果、人生の転機を経験する。それはミルクマンにとって “ Infinite possibilities and enormous responsibilities ” (68)を感じた瞬間である⁴。こうした事は母親が父親に殴られるという犠牲の結果経験した事であり、母親は無意識ながらもミルクマンに人生の新たな局面を見開かせるという教育者の役割を果たしている。母親はミルクマンと父親の関係、そしてミルクマンの未来について犠牲となる事で、ウィレンツがアフリカ文化について説明しているのと同じように教育者の役割を担っている。母親の犠牲とミルクマンの獲得の構図が見えてくるだろう。

ミルクマンにとって重要な働きをする登場人物がもう一人いる。ミルクマンのいところで、恋人であったヘイガーである。いところ同士

の恋人という普通ありえない状況は、ミルクマンの欲望とヘイガーが不要になったら捨て去るという身勝手さで、通常はミルクマンの男性的搾取の例として、ヘイガーに非はないと考えられている。実際に捨て去られるヘイガーに対して、元の友人であったギターが優しい言葉をかけて慰めるという場面も見受けられる⁵。捨て去られたヘイガーの狂気に対してマリン・ラヴォン・ウォルサー (Malin LaVon Walther) は以下のような評価を下している。

It is not so much that Hagar is crazed; rather Morrison uses Hagar to enact the insanity of our own American cultural standards of female beauty. In a society that overvalues visual appearance, which is implicitly based on white consumer criteria, Hagar believes she must buy and put on beauty to attract Milkman's look and his love. (780)

ウォルサーはヘイガーによるミルクマンを引き付けるための浪費を彼女自身の狂気ではなく、アメリカ的価値観の欠点と考えている。しかし、愛した男の裏切りにより、その男を殺そうとする憎しみに、愛情が容易に変化してしまうのは、彼女自身の欠点とは言えないだろうか。高価な服や化粧品を買いあさって自分を飾りミルクマンを引き付けようとする行動は、愛と物の混同ではないだろうか。ヘイガー自身に欠点がないとは思えない。ウォルサーによるヘイガーの狂気がアメリカ的価値観の狂気という意見よりも、私はヘイガー自身に幾分かの欠点を見出せると考える。ミルクマンの裏切りがあるにしても、愛から殺そうとする憎しみへの変化は極端すぎる。また、当事者以外の他者の意見でも “ I don't want no trouble with that girl Hagar. No telling what she might do. She jump that cousin of hers, no telling what she might do to me ” (312) という邪魔者扱いの言葉が聞こえてくる。ミルクマンの裏切りにも幾分か理由を与えても不思議ではないのかもしれない。

必ずしも理想的な恋人ではないヘイガーを捨て去る事により、ミルクマンはどういう考えを持つようになるのだろうか。“She had a right to try to kill him too”(277)と譲歩を見せつつ、自分についてこのような考えを巡らす。

Apparently he thought he deserved only to be loved—from a distance, though—and given what he wanted. And in return he would be. . . what? Pleasant? Generous? Maybe all he was really saying was: I am not responsible for your pain; share your happiness with me but not your unhappiness.

They were troublesome thoughts, but they wouldn't go away.
(277)

ヘイガーへの裏切りの結果、自身について考えを深めたミルクマンであり、自我の目覚めを経験している。自身についての新たな知識を得たと言っているだろう。ヘイガーの犠牲があつて、やはりここでも獲得を経験しているミルクマンである⁶。

父親による母親への暴力という、母親の犠牲、そして自分の恋人への裏切りというヘイガーの犠牲。その両方によってミルクマンは新たな自分へと変化した。金塊の探求においても獲得と喪失という矛盾を経験したミルクマンであるが、ミルクマンの関わる女性が犠牲になることで、彼は新たな自分を獲得している。作品中の女性の犠牲とミルクマンの獲得は、金塊探求の場合と同じような構図になっている。喪失と獲得、犠牲と獲得は似た構図である。

結論

ここまで第1節では金塊の探求が獲得と喪失、つまりミルクマンの祖先の知識の獲得とギターとの友情の喪失という両方を生み出している事を示した。第2節では女性の役割に注目して母親が暴力を

受ける事、そして恋人のヘイガーがミルクマンに捨てられるという両方の女性の犠牲により、ミルクマンは父性への挑戦や新たな自我の目覚めなどを経験する事を示した。女性の犠牲によってミルクマンが新たな自分を得るのは、金塊の場合の喪失と獲得の構図に似ているという事を示した。作品中で獲得と喪失の両面性は重要な要素なのがあったであろう。

本稿の問は作品の結末でミルクマンがギターと戦い、その途中で作品が終わってしまうその特徴の意味を明らかにする事であった。ミルクマンがギターに飛び掛かり結末が示されない終わり方の意味を考えるのが問である。この作品はロバート・スミスという保険集金人が飛び降り自殺する事からはじまり、「飛ぶ」という行為に注目されるような始まり方をしている。飛び降り自殺という行為はマイナスの印象を与えるが、作品中での飛ぶ行為はプラスの印象を与えるものが多い。作品の結末部分で、ギターが誤ってパイロットを撃った時のミルクマンのパイロットへの印象は“ Now he knew why he loved her so. Without ever leaving the ground, she could fly ”(336)というものであり、自分の生き方を否定しないで自分を解放しているパイロットに賛辞をおくっている。そしてさらに、以下のミルクマンが見る飛ぶ夢の意味を、飛ぶ行動のプラスの暗示として挙げてみたいと思う。

Milkman slipped into Sweet's bed and slept the night in her perfect arms. It was a warm dreamy sleep all about flying, about sailing high over the earth. But not with arms stretched out like airplane wings, nor shot forward like Superman in a horizontal dive, but floating, cruising, in the relaxed position of a man lying on a couch reading a newspaper. Part of his flight was over the dark sea, but it didn't frighten him because he knew he could not fall. He was alone in the sky, but somebody was applauding him, watching him and

拍手を受けるという飛ぶ行為のプラスのイメージは明らかであろう⁷。そして最後の一文、“If you surrendered to the air, you could ride it”(337)という言葉も飛ぶ事への賛辞の言葉である。

ミルクマンが最終場面でギターに飛び掛かるという積極性を見せたのは、パイロットの死という喪失があったからであり、上に示したプラスの意味の飛ぶ行為をミルクマンが実際にやる事と飛び掛かる積極性は喪失によってもたらされたものである。喪失と獲得のモチーフは最終場面でも明らかである。ではどうして決着がつかない終わり方をこの『ソロモンの歌』はしているのだろうか。それはミルクマンが人生で経験し、既に第1節、第2節で明らかにした、喪失と獲得の継続性、持続性がミルクマンの成長と重なり、喪失と獲得の矛盾を解消していこうとする継続性が人生である、というメッセージだからである。パイロットの喪失によって得たプラスの意味を持つ飛ぶ行為の実践とその積極性がミルクマンの人生の暗示なのである。ギターとミルクマンの戦いの途中で終わるこの作品は、喪失と獲得の矛盾の解消の継続性こそ人生であるという意味を示している。これが作品が途中で終わる事の意味を問にした、本稿の論題への答である。

『ソロモンの歌』はアフリカ系アメリカ女性作家トニ・モリソンによって書かれた作品であり当然人種や女性の問題について論点が出やすい⁸。しかし私がここで示したように、この作品は黒人の主人公ならずとも白人の主人公であっても、同じような意味を提示する事が可能な作品となっている。普遍性が文学を評価する上で重要な要素であるが、この作品は様々な解釈の可能性を含んだ開かれたテキストであり多くの研究をさらに期待し本稿の考察を終える。

註

1. 以下、『ソロモンの歌』からの引用は、Toni Morrison, *Song of Solomon*, Vintage Books, 2004年の版に拠る。
2. ギターが所属するこの組織が表す7はキリスト教文化の中で完全性を表す。ヘブライ語の7の意味は数字と共に、「契約」の意味がある。そのため旧約聖書では7は神聖な数字である。ギター自身が考える自分が行っている事への完全性や神がかりを持たせたい契約の性格が類推できる。
3. パイロットにはへそがない、という非現実さがある。女性の元型アニマをユングは「肉体的なアニマ」、「ロマンティックなアニマ」、「霊的なアニマ」、「知的なアニマ」の4段階を示しているが、パイロットのイメージは第3段階、第4段階のイメージに近い。アニマとは男性の心の成熟度を示す女性への見方である。
4. キリスト教の文化圏であるアメリカにおいて、キリスト＝父の観点から父性が重視され、色々な作品で父性がテーマになっている。対して農業＝母なる大地のイメージの観点で、日本文学では母性が度々テーマとして選ばれる傾向がある。農耕社会としての日本のイメージは極論かもしれないが、同じように農業も盛んなアメリカよりも母性が重視されるように思える。
5. ギター自身がヘイガーに対して若干の恋心があり、それゆえミルクマンへの憎悪をさらに増大させているとも考えられる。
6. アフリカに飛んで行ったソロモンも子供を犠牲にしたから自由を獲得したのであり、犠牲と獲得の構図はこの点からも重要である。
7. ユングの心理学では空を飛ぶ夢が自由への憧れ、自分を向上させたい願望、社会的な独立の意志、抑制からの脱出などを表しているが、ミルクマンの心情とも重なっている。
8. この点に関して例えば、エドワード・ゲレーロ (Edward

Guerrero)はモリソンはアフリカ系女性作家であるため、
“ boundaries that encompass the sexual objectification of
women ”(762)を問題にしている、と述べている。

引用 · 参考文献

- Bennett, Juda. "Toni Morrison and the Burden of the Passing Narrative." *African American Review*, Summer, 2001, Vol. 35, No. 2 (Summer, 2001), <https://www.jstor.org/stable/2903253>, pp. 205-17.
- Guerrero, Edward. "Tracking 'The Look' in the Novels of Toni Morrison." *Black American Literature Forum*, Winter, 1990, Vol. 24, No. 4, Women Writers Issue (Winter, 1990), <https://www.jstor.org/stable/3041801>, pp. 761-73.
- Heyman, Richard. "Universalization and its Discontents: Morrison's *Song of Solomon*--A (W)hol(e)y Black Text." *African American Review*, Autumn, 1995, Vol. 29, No. 3 (Autumn, 1995), <https://www.jstor.org/stable/3042389>, pp. 381-92.
- Khayati, Abdellatif. "Representation, Race, and the 'Language' of the Ineffable in Toni Morrison's Narrative." *African American Review*, Summer, 1999, Vol. 33, No. 2 (Summer, 1999), <https://www.jstor.org/stable/2901281>, pp. 313-24.
- Lee, Dorothy H. . "Song of Solomon: To Ride the Air." *Black American Literature Forum*, Summer, 1982, Vol. 16, No. 2 (Summer, 1982), <https://www.jstor.org/stable/2904138>, pp. 64-70.
- Morrison, Toni. *Song of Solomon*, Vintage Books, 2004.
- Rothberg, Michael. "Dead Letter Office: Conspiracy, Trauma, and *Song of Solomon's* Posthumous Communication." *African American Review*, Winter, 2003, Vol. 37, No. 4 (Winter, 2003), <https://www.jstor.org/stable/1512383>, pp. 501-16.
- Ryan, Katy. "Revolutionary Suicide in Toni Morrison's Fiction." *African American Review*, Autumn, 2000, Vol. 34, No. 3

(Autumn, 2000), <https://www.jstor.org/stable/2901380>, pp. 389-412.

Story, Ralph. "An Excursion into the Black World: The "Seven Days" in Toni Morrison's *Song of Solomon*." *Black American Literature Forum*, Spring, 1989, Vol. 23, No. 1 (Spring, 1989), <https://www.jstor.org/stable/2903998>, pp. 149-58.

Visvis, Vikki. "Alternatives to the "Talking Cure": Black Music as Traumatic Testimony in Toni Morrison's " *Song of Solomon*". " *African American Review*, Summer, 2008, Vol. 42, No. 2 (Summer, 2008), <https://www.jstor.org/stable/40301210>, pp. 255-68.

Walther, Malin LaVon. "Out of Sight: Toni Morrison's Revision of Beauty." *Black American Literature Forum*, Winter, 1990, Vol. 24, No. 4, Women Writers Issue (Winter, 1990), <https://www.jstor.org/stable/3041802>, pp. 775-89.

Wilentz, Gay. "Civilizations Underneath: African Heritage as Cultural Discourse in Toni Morrison's *Song of Solomon*." *African American Review*, Spring, 1992, Vol. 26, No. 1, Women Writers Issue (Spring, 1992), <https://www.jstor.org/stable/3042077>, pp. 61-76.